

【海外留学レポート】

韓国で過ごした 345 日

-外国人として生きるということ-

My 345 Days in Korea: Living as a Foreigner

近畿大学国際学部国際学科東アジア専攻韓国語コース 小林 可奈子

KOBAYASHI Kanako

(Faculty of International Studies, Kindai University)

キーワード：韓国留学、異文化理解

はじめに

2016年9月、私は学部のプログラムとして約一年間韓国・ソウルに留学をした。団体での留学だったとはいえ、大学に入学してわずか半年も経たずに海外に放り出されたのだ。大学入学当時、私は好きだったK-POPへの情熱と漠然とした海外留学への期待感だけを胸に大学生活をスタートさせ、留学までの半年間「詰め込み教育」とも言えるような韓国語の授業を毎日受け続けた。こういった書き方をするとこのプログラムを否定的に捉えているようだが、結論から言うと私は留学を終えて1年ほど経った今、この早期留学プログラムは私にとって成功であったと捉えている。私が大学1年生～2年生にかけて韓国で感じた様々な感情、そして出会った人々との出会いが今の私に大きな影響を与えていることが確かだからだ。

留学を始めて

私はソウルにある慶熙大学にて留学生生活を過ごした。寮も学内に位置する学生寮に滞在した。入寮の手続きや、口座開設の準備、外国人登録証申請の手続きなど、慶熙大学にいる今回のプログラムの担当教員の方が通訳もしながらスムーズに行ってくれた。そういった小難しい作業において学部プログラムの恩恵をかなり受けていたように思える。

慶熙大学はソウル屈指の名門大学であるがゆえに、大学周辺には学生街がしっかりと存在していて、必要なものはほとんど手に入るほどであった。しかしながら、その他の有名大学ほどに人が集まるよ

うな学生街でもないため、留学生活を送るにはとてもちょうどいい環境であったと思う。キャンパスはソウル市にあるソウルキャンパスと、ソウルから南に行った水原市付近にある国際キャンパス、ソウル近郊で平和福祉大学院のある光陵キャンパスの三つがある。私は語学堂（外国人が韓国語を学ぶための学校）に通っていたためソウルキャンパスで過ごした。また慶熙大学は韓国国内でも特に外国人に対する韓国語教育に力を入れている学校である。したがって、大学内にある語学堂（国際教育院）には世界中から韓国語を学ぶためにやってきた学生が集まっている。のちに言及するが、韓国留学は韓国語を学び韓国人と出会うためだけの留学ではないということを、この語学堂に通いながら痛感することになる。

留学を始めて最初の約1週間は同じ学科の日本人の友達と一緒に観光気分で過ごしていた。ソウル市内の観光地である明洞や、服が安く手に入る人気スポットの高速ターミナルなどに足を運んだ。それに寮は二人一室で、ルームメイトも気の知れた同級生。慣れない外国での暮らしを始めたばかりで不安も多かったが、いつも日本語の通じる友達と一緒にいてくれた。留学をスタートさせて間もなく、ホームシックになる人が多いと聞いていたこの時期に、私が寂しさや不安よりもこれからの生活に対する希望や期待感を感じられたのは、この学科の友達の存在が大きかったのだろう。



図1 留学生活初日

挑戦と自信

私が今回韓国に留学した理由は、韓国語の向上はもちろん、外国人との交流を経て幅広い視野を身につけることであった。そして同時に私が韓国留学するにあたって一番不安要素としていたことは自分の韓国語の実力だ。高校時代に韓国語の授業を受けていたわけでもなく、独学で韓国語検定や TOPIK をすでに修得していたわけでもなかったからだ。そういった経験を経ている同級生を見ると勝手に劣等感にかられていた。そんな自分に不甲斐なさも感じた。しかし、韓国に来てから韓国語が主要言語となり、使用頻度が増えたため少しずつではあるが、わかることも増えてきたのだった。

そして留学開始から約1ヶ月経ったある日、先生がクラスで韓中日キャンパスハーモニーという大会について紹介してくれた。その大会は中級1（語学堂では初級1～高級2にクラス分けされている）から参加資格があり、日本人・中国人・韓国人がグループとなって参加する UCC (User Created Contents)

映像プレゼンテーション大会であった。テーマは「日中韓の文化交流」と決められており、そのテーマに沿って予選までに動画を製作し、本選では動画の放映とそのテーマについてのプレゼンテーションを行うという流れであった。私は当時中級1で参加資格を満たしていたため先生は「賞金ももらえるし、いい機会だから出てみなよ」とおっしゃった。その時、私は自分のレベルでは到底無理だと思っていたため、全く参加する意思はなかった。今思うと当時の私は自分の実力に見切りをつけて、挑戦することや行動することに臆病になっていたのだと思う。しかし、同じクラスの中国人のお姉さんが「一緒に出たい。あなたと一緒にならきつとうまくできると思う」と言ってくれたため、出場を決めた。その一言は今でも明確に覚えている。

そして先生の紹介で韓国人の男の人と三人一組のチームを組むことになった。しかし、大会の準備をするうちに自分の語学力不足と積極性の足りなさを感じるようになった。3人で会議をしているのに主に話をしているのは私を除いた二人になっていたり、私の意見を求められてもうまく伝えられなかったり。今考えるとやはり私は、その大会に参加できる本当に最低限のレベルでしかなく、チームのメンバーに頼らざるを得ない、ただそこにいるだけの日本人メンバーだったのだろう。私の自尊心はとっくに砕けていた。

そういった私の感情とは裏腹にチームが作成したUCC動画は予選を突破し、本選へと駒を進め、あっという間に本選当日を迎えた。本選では直前、緊張でものすごく手が震えて、汗が止まらなかった。そこにあった問題は韓国語の実力に関するものなどではなく、人前で舞台に立つという挑戦に対する恐怖心だった。私たちの出番を迎える直前にメンバーの二人が自信を持って舞台に上がろうと私に声をかけてくれた。私は言葉の通り自信を持つためにこれまで行って来た準備過程を思い出しながら舞台上上がった。

結果として私は思うようにプレゼンをすることはできなかった。声は震え、必死に覚えた文は自然と発することはできなかった。思うようにはできなかったけれど、私なりに努力した結果ではあった。いつも誰かが前に入るのを見送っていた私が、初めて自ら一歩前に踏み出せたと感じた瞬間だったのだ。結果、私たちのチームは見事準優勝し、賞金に300万ウォンと航空券を獲得した。その勝因は私のミスをもカバーできるほどに見事な二人のプレゼンと、毎日編集を重ねたUCCにあったと思う。

大会の結果をすぐに日本にいる両親に伝えた。両親は電話越しに歓喜の声を伝えてきた。私が異国で頑張っているという姿を何らかの形で両親に示すことができたのが賞金よりも何よりも嬉しかった。挑戦することの意味、挑戦することによって得られる自信、そして挑戦を後押ししてくれる周りの人々の存在を再認識することとなったこの大会は、私にとってかけがえのない思い出となった。



図2 韓中日キャンパスハーモニー当日



図3 表彰状

인연 (因縁)

韓国語に인연(因縁)という言葉がある。日本語の「因縁」という否定的なイメージよりは「縁」という肯定的イメージを表す単語だ。私の留学生活はまさに인연(因縁)の連続であった。今も留学生活を振り返った時に思い出される瞬間は、一人で過ごした瞬間ではなく、誰かと一緒にいたもう二度と同じ時のない瞬間たちだ。特に韓国で出会った外国人留学生との出会いは、私の価値観、そして今後の将来を大きく左右することとなった。ここからは、私が留学中に彼らと出会ったことで見つけた目標、そして帰国後の彼らとの交流について述べていきたい。

私が入寮した慶熙大学の世和園という寮には、一階に共有スペースのようなものがあり、そこにはテレビやパソコン数台、電子レンジ等が用意されていた。寮生は自由に共有スペースを活用でき、夜になると約束したわけでもないのに自然と人が集まって、気ままにそこにいる人と話すという雰囲気であった。最初は何も知らなかったため、学科の友達とただ集まって話していたのだが、いつの間にか学科の友達以外の外国人留学生や韓国人学生とも友達になって、いつの間にか私たちは「世和ファミリー」と言うようになっていた。日本では出会ったことのない国からやって来た留学生たちと、不完全なたどたどしい韓国語で会話をしていた。もはやどんな話をしていたのかも、どんなことが契機で仲良くなったのかも覚えていないけれど、この寮で私は国籍も性別も関係なく人と人として出会い、仲良くなっていった。



図4 世和ファミリーと一緒に

特に私が仲良くなった友達は中国人の友達であった。当時、韓国には韓国語を学ぶ外国人留学生の中で中国人が圧倒的多数を占めていて、特に語学堂のクラスのレベルが上がれば上がるほど、多国籍だったクラスが一変し、アジア（中国語圏）の学生が増えていった。そのような中、二学期連続で彼女と同じクラスになり、私たちは授業後や休日に一緒に遊びに行くようになった。彼女は中国にある芸能系大学に在学し、韓国で語学留学をしていた。私と彼女は美術館や芸術系の展示場に行くことが好きだったため、共にいろいろなところに鑑賞しに行った。彼女の韓国語はお世辞にも上手とは言えないレベルではあったが、私たちは分からないなりにお互いに話し方を工夫していたのだと思う。

次第にそんな彼女の育って来た環境である中国、そして中国語について興味を持つようになった。私はそれまで中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。しかし、彼女と仲良くなって、国籍も母語も違うけれど、そういった違いを超えた付き合いを通して、私の中での中国に対するステレオタイプが変わっていくのを感じた。留学を始めた当初、私の目標は韓国語を学ぶこと、そして異文化に対する理解を深めることであった。この漠然とした目標の中に出会った人々が今まで過ごして来た国に、私が直接足を運んで直接見て、感じてみたいという具体的な目標ができた。そして、帰国して2ヶ月ほど経った頃に彼女のいる中国・北京に一人で旅行することにした。

初めての中国旅行はとても新鮮で、新しい世界との出会いを感じた3日間だった。私が彼女と出会わなければ見ることのできなかつた景色だっただろう。私にとって中国を知る機会が彼女であったように、私が誰かにとって日本を知るきっかけになったりする。フィールドが韓国であれば韓国のことだけを知ることができるというのは、大間違いだ。そこで出会った人々との縁が新しい分野への関心を結んでくれることもある。そういう可能性を秘めているのも留学なのである。世界中に散らばった今も、変わらず連絡を取り続けている。留学中に出会った友人たちは私にとって大事な一生の友達になった。



図5 中国・天安門

外国人として生きること

私が日本を出て、初めて外国である韓国で外国人として生きたこの345日の留学生活は、日本では体験したことのない様々な自分の姿や感情に接した日々であった。言葉も不自由で、家族もいない不慣れた環境で生き抜く中で、何気ない日常を省みることができた。特に今まで育てて来てくれた両親に対する感謝の気持ちを強く感じた。大学生になって、なんとなく自立したような気になっていた私が本当は一人では何もできないという無力さを知った。そして外国人として生きていく中で感じる空虚さ。韓国にいたから尚更感じていた部分もあったかもしれない。しかし、その外国人であることを武器にして様々なことに挑み続けられた面もある。大会に参加できたことも、留学生同士の間が深まったこともそういった影響があったのではないかと思う。外国人として生きるということは留学生活における醍醐味である。これからの留学を検討している方々、そして留学生活を送ることになる方々に私が強く伝えたいことは、あなた自身が直接感じた感情を大事にしてほしいということと、初心を忘れないということだ。そして常に新しいものと積極的に出会えるように自主的にアクションを起こしていくことが、留学生活を終えた後にも残る何かを見つけることができる機会になるのではないかと思う。私にとって韓国留学は私らしさを見つける経験になった。あの頃の生活は今の私を動かす原動力であり、大切な思い出だ。



図6 語学堂卒業式